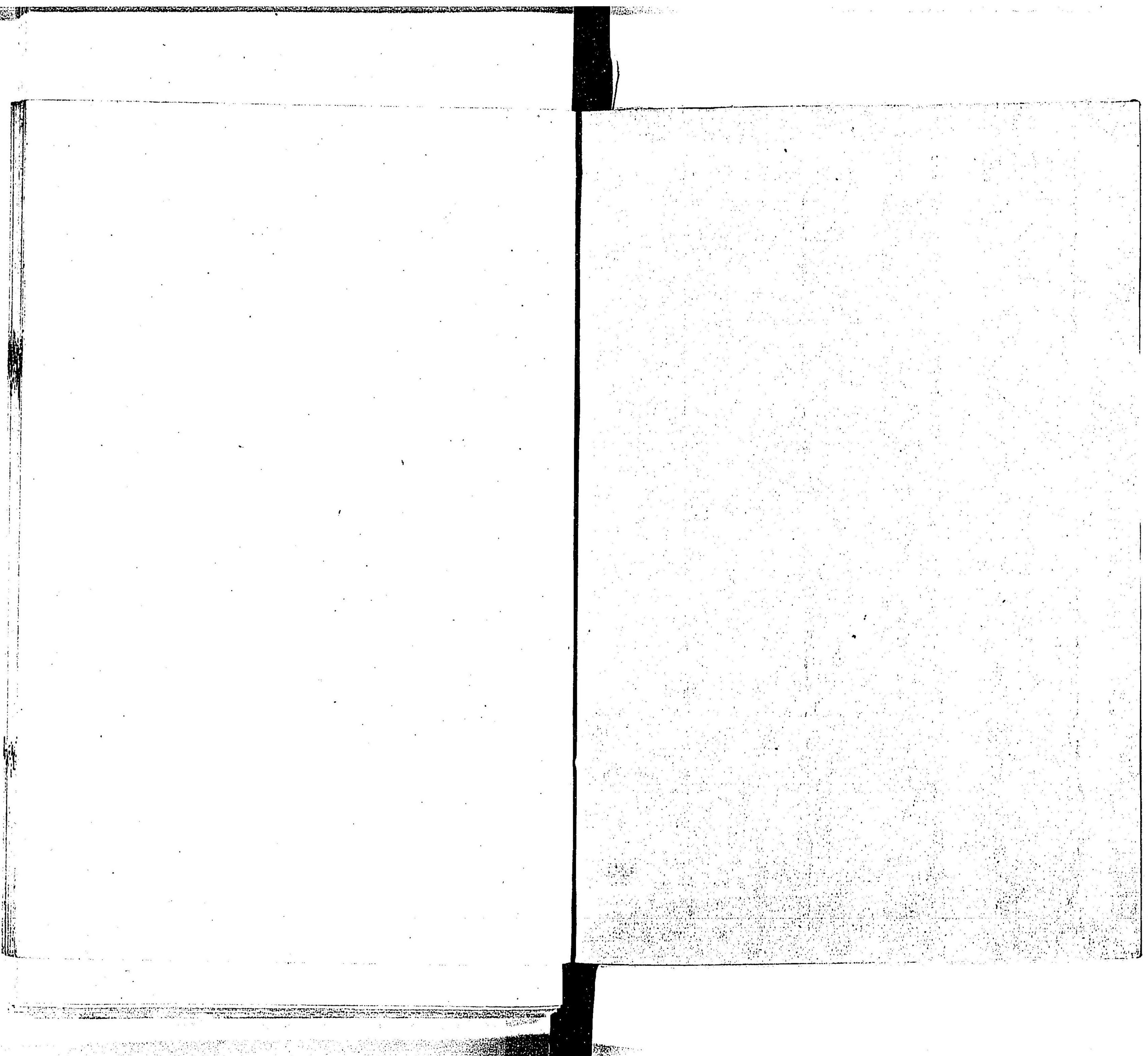


特42

446

小 菩 佛 威 白  
 堀 鳥 愿 久 髯  
 元

訂  
 親  
 世  
 流  
 住  
 有  
 百  
 拾  
 番



白髯



君と非と道とくは流まる

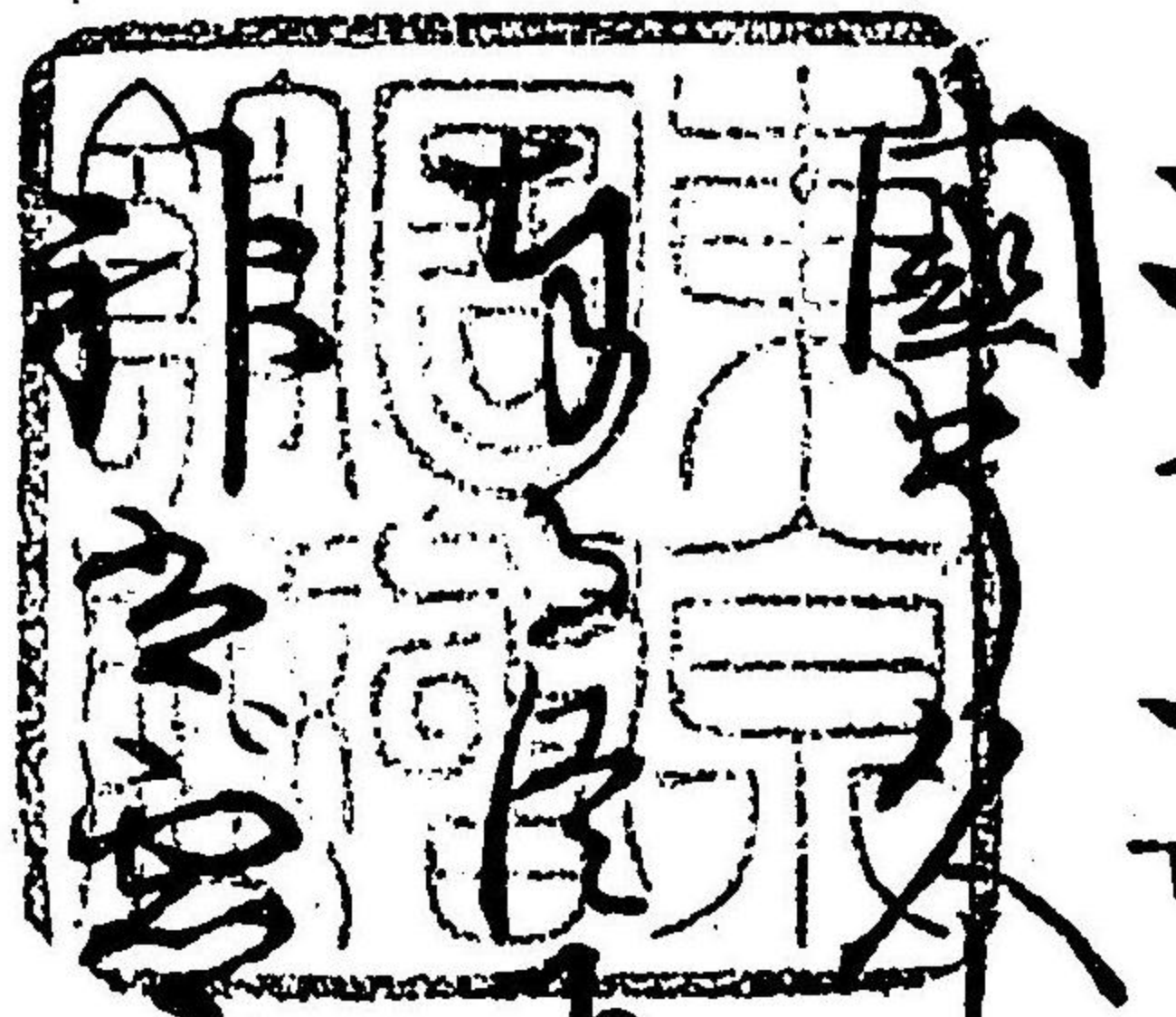
國又手は是公當今は

也梅も江別白髯の月

非多き非く流るる君此程

少一非は流るる君此程

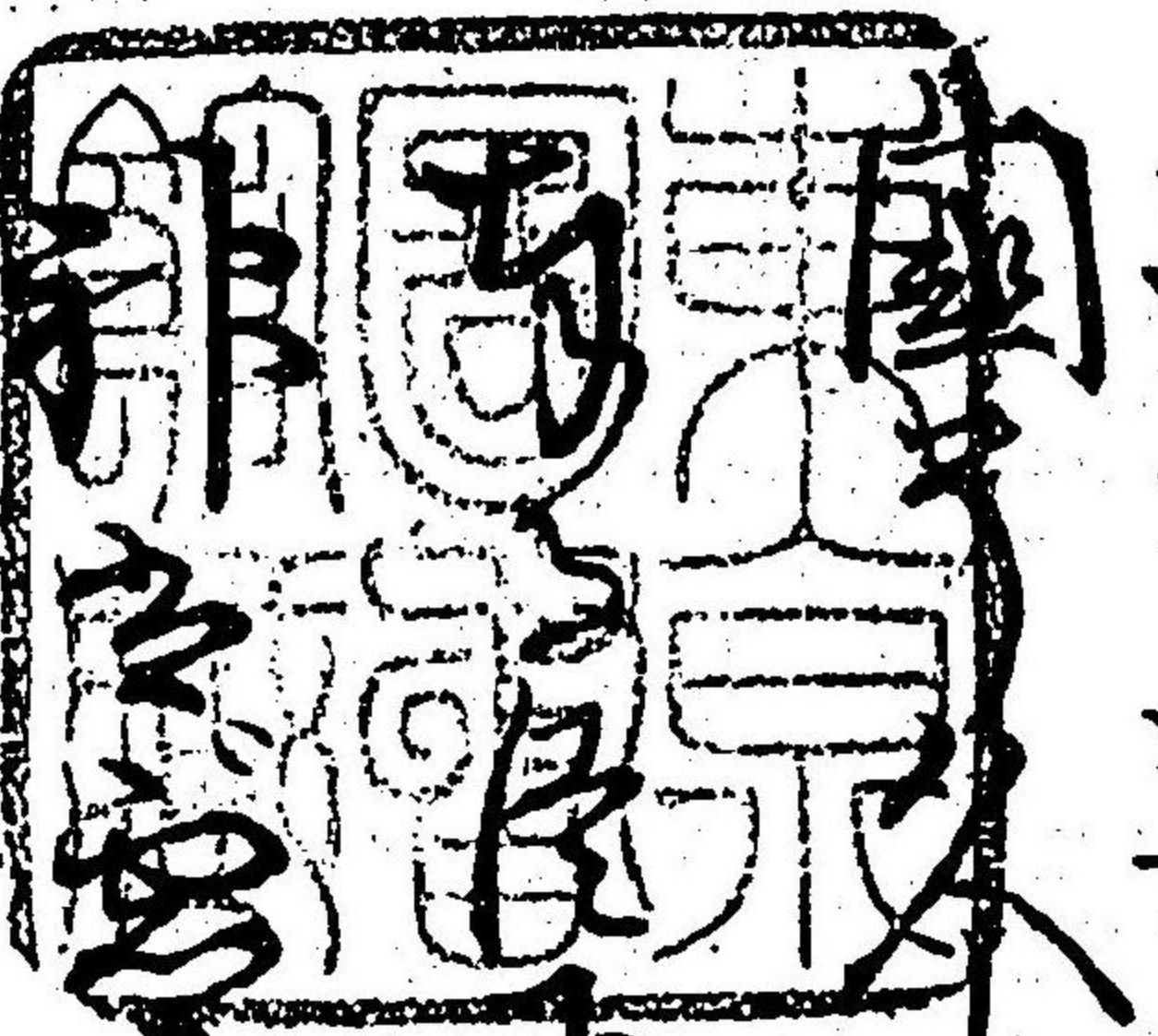
少一非は流るる君此程



白髯



君と下と道とをよむは



松島公當今もは  
下也梅も江別白髯明  
部とく清高の表此道

少一たは是等の世昔ま  
ふくはたしき世の世道

蒙る。白髯の月神よ。勅使  
 手はる。九重の。花蘭の  
 志賀の。野の。入江  
 乃着。浦の。入り  
 だら。白髯の。宮  
 釣。

行。白髯の。宮  
 梅。海。舟  
 風。帆  
 江。天  
 風。帆  
 萬  
 白  
 花

かきも白も目もきもあふ ウ 賦 ト 子 一

海 ウ 子 一 白 ト 子 一 海 ウ 子 一 白 ト 子 一

言 ウ 子 一 白 ト 子 一 海 ウ 子 一 白 ト 子 一

漕 ウ 子 一 白 ト 子 一 海 ウ 子 一 白 ト 子 一

も ウ 子 一 白 ト 子 一 海 ウ 子 一 白 ト 子 一

越 ウ 子 一 白 ト 子 一 海 ウ 子 一 白 ト 子 一

水 ウ 子 一 白 ト 子 一 海 ウ 子 一 白 ト 子 一

乃者 ウ 子 一 白 ト 子 一 海 ウ 子 一 白 ト 子 一

あ ウ 子 一 白 ト 子 一 海 ウ 子 一 白 ト 子 一

市 ウ 子 一 白 ト 子 一 海 ウ 子 一 白 ト 子 一

別 ウ 子 一 白 ト 子 一 海 ウ 子 一 白 ト 子 一

く ウ 子 一 白 ト 子 一 海 ウ 子 一 白 ト 子 一

多 ウ 子 一 白 ト 子 一 海 ウ 子 一 白 ト 子 一

あ ウ 子 一 白 ト 子 一 海 ウ 子 一 白 ト 子 一

昔まゝの御使の御使の御使の御使  
引の箱も表としてたよか箱は御使  
給の御使の御使の御使の御使  
まの御使の御使の御使の御使  
直成徳代の御使の御使の御使  
を頼むる御使の御使の御使  
まの御使の御使の御使の御使

白髯の御使の御使の御使の御使  
可の御使の御使の御使の御使  
我の御使の御使の御使の御使  
も御使の御使の御使の御使  
有箱やく御使の御使の御使の御使

一、佛の可なりとて...  
 二、佛の可なりとて...  
 三、佛の可なりとて...  
 四、佛の可なりとて...  
 五、佛の可なりとて...  
 六、佛の可なりとて...  
 七、佛の可なりとて...  
 八、佛の可なりとて...  
 九、佛の可なりとて...  
 十、佛の可なりとて...  
 十一、佛の可なりとて...  
 十二、佛の可なりとて...  
 十三、佛の可なりとて...  
 十四、佛の可なりとて...  
 十五、佛の可なりとて...  
 十六、佛の可なりとて...  
 十七、佛の可なりとて...  
 十八、佛の可なりとて...  
 十九、佛の可なりとて...  
 二十、佛の可なりとて...  
 二十一、佛の可なりとて...  
 二十二、佛の可なりとて...  
 二十三、佛の可なりとて...  
 二十四、佛の可なりとて...  
 二十五、佛の可なりとて...  
 二十六、佛の可なりとて...  
 二十七、佛の可なりとて...  
 二十八、佛の可なりとて...  
 二十九、佛の可なりとて...  
 三十、佛の可なりとて...  
 三十一、佛の可なりとて...  
 三十二、佛の可なりとて...  
 三十三、佛の可なりとて...  
 三十四、佛の可なりとて...  
 三十五、佛の可なりとて...  
 三十六、佛の可なりとて...  
 三十七、佛の可なりとて...  
 三十八、佛の可なりとて...  
 三十九、佛の可なりとて...  
 四十、佛の可なりとて...  
 四十一、佛の可なりとて...  
 四十二、佛の可なりとて...  
 四十三、佛の可なりとて...  
 四十四、佛の可なりとて...  
 四十五、佛の可なりとて...  
 四十六、佛の可なりとて...  
 四十七、佛の可なりとて...  
 四十八、佛の可なりとて...  
 四十九、佛の可なりとて...  
 五十、佛の可なりとて...

テ上

我の相成道の時...  
 地の原より可なりとて...  
 住無有愛易れ...  
 ありて...



後の大官指現あることあり  
名目なる人壽百歳の時世世とまれ  
給りて八十年乃其の比頭水面西  
右脇仰接提の浪と清ゆるりまき  
佛の常位不滅法界の妙持あり  
ハ昔ありて其の鳴る所中津  
國とは發せしむる時ありきや  
と

らもせすねの代ありて仏法  
乃名字と入るる家よ此敷山麓  
林麋ら後や志加門浦の鳴る釣  
せたる若翁ありて其の世より向  
つる翁も此地のありたる此  
山を移しありて又法まづりの地  
とありしと宣へし翁を

此の世に我人壽の初より此  
山のまきしてげん海に七度まで  
聲原の叫びもまよひたる  
翁也たし此地をうらと成なる  
釣より前をありてをうらと惜ま  
しきん契る力ありて今も病を去ま  
ふと志願入る時東方より海

おの世果のありて華の息を吐給  
ひくまはるもあやの地をいふ法  
をひろめがゆりて事よ我人壽二方  
翁のまきしてげん海に七度まで  
翁のまきしてげん海に七度まで  
昔も人まきも開闢志願入抄も此  
のまきしてげん海に七度まで



在<sup>ニ</sup>下<sup>ニ</sup>... 上<sup>ニ</sup>...  
 入<sup>ル</sup>ま<sup>ル</sup>白<sup>き</sup>ま<sup>り</sup>く<sup>し</sup>...  
 被<sup>テ</sup>色<sup>く</sup>... 敷<sup>も</sup>...  
 非<sup>レ</sup>... 舞<sup>ハ</sup>...  
 人<sup>ノ</sup>... 威<sup>を</sup>...  
 して... 使<sup>ハ</sup>...  
 知<sup>ル</sup>... 社<sup>の</sup>...  
 より... 成<sup>ハ</sup>...

靡<sup>も</sup>...  
 渡<sup>る</sup>...  
 何<sup>ら</sup>...  
 一<sup>も</sup>...  
 感<sup>涙</sup>...  
 何<sup>ら</sup>...  
 勤<sup>使</sup>...

言... 邦楽... 竹の... 舞... 鼓... 松... 鼓... 志... 雲...

面鳴動する... 天燈籠... 早... 天... 舞... 鼓... 志... 雲...

多神も...  
と威...  
久...  
く...  
わ...  
白...  
御...

威久

行...  
行...  
行...  
安...  
興...

大徳の親世音らへ草を  
のこす誓ひの末一称一会頼  
ありまへても多年値遇乃結  
縁せあかこも甚はくち行や  
所うまの清水寺の花威 悔るま  
あふら名残う那 昔より大くぬもを  
と及山 鄙津 入るる 見

復きは柳梅をいもませと錦と  
三つぬ錦乃かまきりると思出  
乃復り成入ま東路よ思さくき名  
結あま 新あま 乃あま馬の家  
よまねあまよかたなま牙とて思ハ  
けり卯の横行ぬ道南の東よ新き  
節白行と行浪らぬは核あ





清見の三保の海田子浦打ちて  
三保の富子の箱根出  
我明行也早月成也鎌倉の志  
きりく 夢中首ありて塵埃  
を隔りてやうき世はうらやま  
くえ水と渡つて此關東よりある百  
年の蒙たの度平の度一寸の光陰

外裏の金ももたぬ錦の雲平のより  
千重の契り一人の替り申あわち  
我々の鑑入る方も霞の光の家  
方のあつてもなりて命命命入  
面をうらさへよりあつたさう  
秋も思ひの 早は 悲痛りや感入の  
獨りも思ひの 早は 悲痛りや感入の

出屋殿甲と云ふ也此方出入甲一歩下

向の由と披露して作甲の意謀一

下とて入法事甲の作甲一甲今も

獨言甲一甲とて命諸人

圖甲の事甲の事甲の事甲の事甲

れ甲の事甲の事甲の事甲の事甲

供家期甲の事甲の事甲の事甲の事甲

初甲此曉甲の事甲の事甲の事甲の事甲

作甲供甲指甲の時刻甲の事甲の事甲

裡去屋殿甲の事甲の事甲の事甲の事甲

苟甲亦甲苟甲の事甲の事甲の事甲の事甲

向甲の事甲の事甲の事甲の事甲の事甲

我甲此甲の事甲の事甲の事甲の事甲の事甲

毎甲日甲の事甲の事甲の事甲の事甲の事甲

今自來讀誦一人二種三法四  
 甲  
 まど鈴一り二久三彼四淨五經六と七讀八誦九度十  
 引一れ二そ三有四り五よ六作七入八出九屋十も十一具十二え十三り十四  
 聽一た二ら三う四ま五り六あ七り八方九親十也十一大十二慈十三  
 大一樂二の三聲四壇五の六忠七報八定九業十亦十一能十二得十三也十四  
 美一薩二入三直四道五と六も七ね八り九つ十の十一無十二緣十三の十四  
 善一樂二と三い四れ五然六と七い八導九一十給十一と十二生十三れ十四

利益一も二い三か四き五の六ほ七甘八善九可十と十一も十二た十三ま十四り十五  
 頼一ま二ん三二四其五願六望七も八い九空十く十一大十二而十三の十四  
 誓一約二豈三虚四妄五も六あ七ら八ん九也十或十一遭十二王十三秘十四苦十五  
 信一門二欲三壽四終五念六彼七觀八音九と十い十一つ十二刀十三尋十四  
 彼一境二方三親四也五此六法七經八と九聽十中十一也十二ハ十三  
 亦一命二も三頼四ま五り六う七ま八り九也十實十一行十二  
 又一く二は三聽四中五の六也七此八法九文十と十一い十二つ十三た十四ら十五ん十六

人王難の災子ありて云々なりぬ細段と  
 され早虎又前巻善区教と云文三つに  
 矢もき身よまき早虎定多の  
 事也去ありまうた命力為よ此  
 文を誦とありあり早虎法要教地  
 獄界畜生生者痛死苦以断善人高識  
 此文入とく早虎乃要教也

三悪道高の入りも早虎も方終と云  
 露の命の惜まの早虎なりと云  
 考れ上存昔在靈山は名の法華一仏  
 今西方のあり又早虎深奥現一繪  
 之れ如馬の觀世音三世の利益因  
 下早虎に刑戮と云早虎なり終の道と云  
 今早虎も威久終の道と云

くくの頼きや清きり清きり清きり清

く睡眠のうらまありたあるは夢

と蒙りていさひのよきる程や

既早八巻の息吹ては寂期の時常

今あつたやくは出るとよ清けまり

きたる事あらはたよ入重居のは經

右よおひの珠のまの命たきとと限

あれの是より此世と門出の度よ

つくと立出る早き士前及とひてみ

つ是れを別乃身の拜清鐘もま

あつる東雲よ早籠もと統早興早よ

由科乃行よ早急まり早夢路を

あつる月ほのやぐ早な早の世早の心早出早あつる

由科乃行よ早急まり早夢路を

愛及志うせ早とあそも給ふ下

威久辛やうて座はあそり清水の方

了あそり西よ向ひて観音の法名

と唱へて侍まれ大分丸た方ななま

わうて称念の聲の下よりもした方

振揚まてさうよ清経のまう眼

まうりお落しきさ大分とみまへ二

は指して候はる辛もある所

子也辛威久も思乃外あは

だ忙辛あはれぬり辛やく行

と疑ひてま此行積福の法経乃文

信刑辛歎壽終辛念彼觀音力辛刀尋

候辛壞入辛經文ありたよ辛曇り辛候

劍辛候辛と辛はれ辛ま辛る辛業辛世辛と辛あ辛る辛



序經と修讀をいふなりわん此時  
常刑戮を思ひて思ひて思ひて思ひて  
急を中も初夜より夜夜  
の一点まで蕭然として宿たき  
一丈塵月ありて思ひて思ひて思ひて  
たきよひ思ひて思ひて思ひて思ひて

音は清の紫沙をうけ水晶の粒珠を  
つらつらと入杖すなりつらつらと  
たしむる善く秋は洛陽東山の  
清吹のありて思ひて思ひて思ひて  
うらな本より大慈大悲の誓を  
うらな<sup>カ</sup><sup>カ</sup>然<sup>然</sup>音成りても神を  
念より思ひて思ひて思ひて思ひて





威久ぞついでいさ平家備侍の侍哉  
 累乃達者およハ乱舞堪能なり  
 國乃及もれえり一年小松殿お山よ  
 て年狩の遊路お清酒宴よとひて  
 ま馬の威久一曲一柱ゆるし關東迄  
 し隠あおは見えぬ夜お折あれハ歌  
 一はまのほあちあつさてはくく

トイ

貴命あり威久のち時節よ降来  
 ぞもつとたり有へくはたきぬ  
 あひつ時なまや天四悔れらるのこ  
 くの國まで目入奉のぞろろる  
 此ころ酒宴あつてまの響く  
 曇ぬ目影のこもて君を移す千秋

つらう園の松の葉のせりて  
正なるつらう長舌の舌れあり  
内きむそれありとまのり  
出まひる威久心の中より

佛原

余前多しと秋のつらう  
乃白山尋し是は都方なり  
僧よりて我来白山探定まの程よ

此秋思り立白山禪定と巻て  
なまはくと翻乃白山志らるる  
すのりてちもあ由懸も祇のまを

赤紅紫たるのぢつひたきこもたると  
峯もくもくをひらきまてしあけもく  
方ハコトナニニ程ハ意の程よ早か賀の  
園松乃原や後中目のきまての程  
よ早か賀の堂よき堂よあけ通らむと  
思シテのハあけなる法僧行  
ふて其は堂よは白のふハま

あまの道はの国とあまのきかんの女性一人  
多うつ我はき我もくまぬよきかか成  
人さへまハまハ是ハ此は原  
よきかんの女もくの時もくあけよ  
ひも此は堂よは白のふハ有難は  
機縁もくまハ國防し白の思よ目  
あしあしは経よき佛也とあへく

くはなせしむるはたふ五障三後の洗身  
あれはまゝのりちを晴くしむるはれ  
備えとまゝゆして涼く支備ふるは  
し給へ 平治 中絶せよと云ふ事ありき  
形なきれ社也家のらあり候と男令  
くはせと者ハ泣きてまゝまてそ 平治 中絶  
其も公もあらうらひし古くは法前やかし

白拍子ハ此國より出へ人也都より  
舞女のかまされ世ハ歸り給ひて後  
よハ故郷あれはまゝく此國よ海へ終ふ  
愛めくちを妻あれ跡乃きま

軍方 此亦中堂の露と清き一具跡なり  
かきおしあはぬふさのり 平治 中絶  
いさおしあはぬふさのり 平治 中絶

原くも名可き昔もさしづ名蹟お  
 きハ一人吊りしも疑ひあり成仏は  
 縁あり其人の一名も教も一佛  
 内道内道 觀ん法界 亦亦本國去去 悉  
 皆成仏と聞可き 佛の原乃草丈迄  
 なく皆成仏なりかきかき 糸糸 ち折ち折 けり  
 のの 花花 もさしづはは 次次 しくしく 雲雲 虫虫 のの 音音 信信 もも 聲聲 仏仏

亦くも名可き昔もさしづ名蹟お  
 光徳此原の昔もさしづもさしづ  
 光徳此原の昔もさしづもさしづ

淨  
 物くも名可き昔もさしづ名蹟お

昔年相國の時妓王妓女佛さしづ

思願舞曲花りさしづもさしづ

遊女有しよ 始めの妓王をさしづ

て遊舞の麗姿をさしづもさしづ



世のさか乃奥深き葉の宿りも閑家  
 のかむくもしよ思ひぬれぬ外  
 あらふ葉の様をとり多うたにハ  
 うもよまふも別捨る身と成ぬま  
 ねもは葉のうらみの靴の跡はよ  
 うももよむる人も今をそはの  
 にかへまふもあまのまをいせ

感後と遠のころあまの昔のころ  
 相直の供今迄もひ給ふ身あふ成  
 人や強ん秋の宿りも代りたの葉  
 せもよ霧のまのまの宿りも閑家  
 行雲行くと白雲の跡をみよと閑家の  
 草の菴の葉あれや露のまのま  
 中堂のまのまのまのまのまのま



かき草衣尾花の袂の露も草堂の

うもよ入よまわく 甲上 松風さじま此

原のうぐく草まかへぬる床とくは法

もあへくおもひくは後師とくそ有難

ま 上 雲を懸る法經也あまも明

方まもあまもあまも寺の鐘も懸る

ひく月落のぬら喜のありまへ死

か 甲上 り床もあまもあまもあまもあまも

ま 甲上 思成もあまも佛乃の思のあまもあまもあまも

影乃のあまもあまもあまもあまもあまもあまも

あ 甲上 まあまもあまもあまもあまもあまもあまも

あ 甲上 まあまもあまもあまもあまもあまもあまも

あ 甲上 まあまもあまもあまもあまもあまもあまも

あ 甲上 まあまもあまもあまもあまもあまもあまも

屋 此原乃 佛の華乃 妙ある油

外をさすもあひく 動色バ 獨あ所

佛の法を尋ねて 尊を乃く

あつ法の場人 法乃

教へもいふ 前仏も

三つ 及佛さす 夢れ

中四六 この世の事 也

ひん 身がな 友事乃

うらな 夢ま 睡れ

う 佛も有ま 人間也

岸 水のか 浮乃 浪

雲 一滴の露のり 行や 如も

華の油 一糸 也

佛のま ひと 也

捨くろ勢子ゆらむかむし捨く

笑子ま重

# 吾知鳥

軍符

是ハ諸国一見ハ僧ましく我いま  
陸奥よりくもあせむのん程よ世度  
思ひ立ちるとの濱一見とみけりてん  
ふよまぶらむかむし捨くま山禪定  
かむかむかむかむかむかむかむかむか  
まよよまぶらむかむかむかむかむかむか

思かんの 扱かんもいれ此立山たてやまも兼かねてみま  
 ま乃なああるる成なりちちいいくくのの方かた様さまままも  
 袈けままああ人ひとのの心こころ鬼おに神かみよりより形かたち打うち  
 ううやや山やま路ぢよよららつつままししれれねねむむく  
 のの要よう該がいのの候こう路ろもも後あとももららいいぬぬままららぬぬ  
 ええぬぬ整せい備びししてて下した下したはは社しゃのの下したに  
 ききれれくくああららまま成なりはは備びまましし人

ままのの心こころ行い事じままてていいらら 陸りく奥おくへ  
 序しりららつつ作しりり言ことははいいららぬぬままららぬぬ  
 濱はまららつつちち備びゆゆままてていい者ものののままららぬぬ秋  
 ららままのの心こころいいららぬぬ其その書かきむむ子このの音ねはは専  
 任にんににてていいららぬぬ養やしまま同どうににてていいららぬぬ  
 行い入い是こゝ思しひひををいいららぬぬ家いへへへあ  
 りあららぬぬ人ひとのの心こころいいららぬぬおおのの心こころいいららぬぬ



葉の<sup>母</sup>か<sup>母</sup>して<sup>母</sup>た<sup>母</sup>く<sup>母</sup>徳<sup>母</sup>う<sup>母</sup>ら<sup>母</sup>す

早

是の諸國一見の僧ありては立山禪定

尸作<sup>母</sup>成<sup>母</sup>具<sup>母</sup>極<sup>母</sup>も<sup>母</sup>さ<sup>母</sup>る<sup>母</sup>き<sup>母</sup>考<sup>母</sup>人<sup>母</sup>の

有<sup>母</sup>ら<sup>母</sup>陸<sup>母</sup>奥<sup>母</sup>入<sup>母</sup>ら<sup>母</sup>る<sup>母</sup>言<sup>母</sup>傳<sup>母</sup>も<sup>母</sup>し<sup>母</sup>ら<sup>母</sup>ず

この眞よりく<sup>母</sup>穢<sup>母</sup>仰<sup>母</sup>め<sup>母</sup>ら<sup>母</sup>る<sup>母</sup>者<sup>母</sup>の<sup>母</sup>ま<sup>母</sup>ま

れ秋<sup>母</sup>牙<sup>母</sup>ま<sup>母</sup>り<sup>母</sup>て<sup>母</sup>其<sup>母</sup>妻<sup>母</sup>子<sup>母</sup>の<sup>母</sup>音<sup>母</sup>と<sup>母</sup>書

てぞ<sup>母</sup>た<sup>母</sup>は<sup>母</sup>い<sup>母</sup>ま<sup>母</sup>る<sup>母</sup>ま<sup>母</sup>同<sup>母</sup>く<sup>母</sup>た<sup>母</sup>は<sup>母</sup>と<sup>母</sup>行<sup>母</sup>る

種<sup>母</sup>の<sup>母</sup>く<sup>母</sup>入<sup>母</sup>空<sup>母</sup>よ<sup>母</sup>し<sup>母</sup>て<sup>母</sup>さ<sup>母</sup>る<sup>母</sup>馬<sup>母</sup>承

り<sup>母</sup>て<sup>母</sup>い<sup>母</sup>ま<sup>母</sup>る<sup>母</sup>く<sup>母</sup>あ<sup>母</sup>る<sup>母</sup>も<sup>母</sup>た<sup>母</sup>り<sup>母</sup>あ<sup>母</sup>る

は<sup>母</sup>ま<sup>母</sup>め<sup>母</sup>の<sup>母</sup>油<sup>母</sup>と<sup>母</sup>い<sup>母</sup>ま<sup>母</sup>し<sup>母</sup>給<sup>母</sup>う<sup>母</sup>て<sup>母</sup>い<sup>母</sup>ま<sup>母</sup>す

是<sup>母</sup>に<sup>母</sup>持<sup>母</sup>く<sup>母</sup>ま<sup>母</sup>う<sup>母</sup>て<sup>母</sup>い<sup>母</sup>ま<sup>母</sup>る<sup>母</sup>思<sup>母</sup>ふ<sup>母</sup>ら<sup>母</sup>う<sup>母</sup>ら<sup>母</sup>る

乎<sup>母</sup>の<sup>母</sup>か<sup>母</sup>は<sup>母</sup>是<sup>母</sup>を<sup>母</sup>夢<sup>母</sup>の<sup>母</sup>も<sup>母</sup>た<sup>母</sup>ま<sup>母</sup>る<sup>母</sup>也<sup>母</sup>

手<sup>母</sup>の<sup>母</sup>田<sup>母</sup>長<sup>母</sup>の<sup>母</sup>あ<sup>母</sup>ら<sup>母</sup>は<sup>母</sup>い<sup>母</sup>ま<sup>母</sup>る<sup>母</sup>あ<sup>母</sup>ら<sup>母</sup>る

後<sup>母</sup>の<sup>母</sup>あ<sup>母</sup>ら<sup>母</sup>は<sup>母</sup>あ<sup>母</sup>ら<sup>母</sup>る<sup>母</sup>あ<sup>母</sup>ら<sup>母</sup>る<sup>母</sup>あ<sup>母</sup>ら<sup>母</sup>る

あれははちや形ををみれば家も  
 成すたれは教養 半 二も久 半 二  
 已む 母 今も出 半 二よ 半 二  
 疑 言 ありき 言 二 言 二  
 一重 言 あれを合 言 二 言 二  
 ち 言 二 言 二 言 二  
 法 言 二 言 二 言 二

あは 言 二 言 二 言 二  
 向 言 二 言 二 言 二  
 業 言 二 言 二 言 二  
 身 言 二 言 二 言 二  
 二 言 二 言 二 言 二  
 二 言 二 言 二 言 二  
 二 言 二 言 二 言 二  
 二 言 二 言 二 言 二





ちも契り一書や今も  
 のなもあまもさるも  
 まか行一教も  
 中身歎も  
 横算の  
 今も

ちまの  
 等々律乃國  
 乃  
 松嶋や  
 の  
 海津  
 今も

て夢よぬるう膏油更落して夢を  
 泉よきし ちよきよきよきよ  
 海に土農工商の家よもたよきよ  
 琴よ其よ書よきよあきよあきよ  
 花よよよよよよよよよよよよよ  
 得よよよよよよよよよよよよよ  
 うあし秋のお長し一夫あきよ  
 一夫あきよ

らう火きろくして眠るよあ  
 九夏の天も暑とわよよよよよ  
 たもあきよよよよよよよよよ  
 ちよきよよよよよよよよよ  
 のよよよよよよよよよよよよ  
 ひよきよよよよよよよよよよ  
 るよよのよよよよよよよよよ

一國の富の増はるは  
 一國の民の富の増はるに  
 依りてはるべし  
 一國の民の富の増はるは  
 一國の民の勤の増はるに  
 依りてはるべし  
 一國の民の勤の増はるは  
 一國の民の徳の増はるに  
 依りてはるべし  
 一國の民の徳の増はるは  
 一國の民の徳の増はるに  
 依りてはるべし  
 一國の民の徳の増はるは  
 一國の民の徳の増はるに  
 依りてはるべし

鷹の如くも親もすはるべし  
 と呼ばれて子もかよふ  
 母とすはるべし  
 鷹の如くも親もすはるべし  
 と呼ばれて子もかよふ  
 母とすはるべし  
 鷹の如くも親もすはるべし  
 と呼ばれて子もかよふ  
 母とすはるべし  
 鷹の如くも親もすはるべし  
 と呼ばれて子もかよふ  
 母とすはるべし

あつたりまづむの持場たては  
あつたりまづむの持場たては  
あつたりまづむの持場たては  
あつたりまづむの持場たては  
あつたりまづむの持場たては  
あつたりまづむの持場たては  
あつたりまづむの持場たては  
あつたりまづむの持場たては  
あつたりまづむの持場たては  
あつたりまづむの持場たては

あつたりまづむの持場たては  
あつたりまづむの持場たては  
あつたりまづむの持場たては  
あつたりまづむの持場たては  
あつたりまづむの持場たては  
あつたりまづむの持場たては  
あつたりまづむの持場たては  
あつたりまづむの持場たては  
あつたりまづむの持場たては  
あつたりまづむの持場たては





甲子の子年たきく若人花の枝を

何れもあはれむる花の枝を

何れもあはれむる花の枝を

貴賤の中よとて花の枝を

何れもあはれむる花の枝を

何れもあはれむる花の枝を

何れもあはれむる花の枝を

何れもあはれむる花の枝を

何れもあはれむる花の枝を

何れもあはれむる花の枝を

何れもあはれむる花の枝を

何れもあはれむる花の枝を

何れもあはれむる花の枝を

何れもあはれむる花の枝を

とさきかへに思ひよらむ 早坂 空の妙成

梢の色にうつらう陰も大夏也 小塩川

早坂 山のみねの原も煙の霞の遠山栂

里の行端の家も 白 白も家の梅も

あはれ 早坂 あはれねし目も紅の 白 白も

雲の 早坂 重丸の 上野 初傳の 早坂 雲

錦と成よます 早坂 櫛をたかむ

あはれ 早坂 花も 早坂 花も 早坂 花も 早坂 花も

浮世相 早坂 あはれ 早坂 花も 早坂 花も 早坂 花も

若山 早坂 今 早坂 白 早坂 花も 早坂 花も 早坂 花も

あはれ 早坂 花も 早坂 花も 早坂 花も 早坂 花も

ひて 早坂 花も 早坂 花も 早坂 花も 早坂 花も

あはれ 早坂 花も 早坂 花も 早坂 花も 早坂 花も

あはれ 早坂 花も 早坂 花も 早坂 花も 早坂 花も



新入の思ひも思ひ出さぬ今所々面

白くさきおのちの世は誠尋せしえ

事<sup>三</sup>はるるも同か一歩大急の行

幸よ在原業平供ち一給ひ一時

かきもかくも后の世中を思出く

新入のちよとあるがよき

と新入の世にたうや天地の神

若代より人の身乃妹背の道は清

かぬ<sup>上</sup>名結よりなるに深きく

ほくくの世にお務の身か首男

若よりぬる才の程歎てむぐし<sup>上</sup>おのち

きの歎てむぐしあるまむ<sup>上</sup>入出

賤なるもあもむ人<sup>上</sup>の心

も<sup>上</sup>あもむ心<sup>上</sup>の世に<sup>上</sup>あもむ









上  
 下  
 左  
 右  
 中  
 外  
 内  
 前  
 後  
 東  
 西  
 南  
 北  
 上  
 下  
 左  
 右  
 中  
 外  
 内  
 前  
 後  
 東  
 西  
 南  
 北

